

二〇二四年四月五日

花万朶妣いまさばと思ひけり
媼みな姉さん被り鹿尾菜干す
雀どち狼藉やまぬ落花かな
くろぼこに円陣なせる仏の座
一門の墓碑堵列せる木下闇
谷川の瀬音に和せる初音かな

二〇二四年四月四日

兄と手をつなぎ入学お下げ髪
あひ互ひ蔓絡めあひ豆の花
山門を入れば天蓋大桜
うち仰ぐ古刹の磴へ若葉影
阿形なる仁王春塵まみれかな

二〇二四年四月三日

小流れの岩を縁取る花筏
羊群のごと中腹の山桜
春暁や靄の内なる畝傍山
春風に犬の立ち耳と見かう見
桜餅葉つば食べる派食べない派
発進も停止も優し花のバス
花の雨傘渋滞す太鼓橋
花筏雨粒に揺れはじめけり
欠伸して猫も春愁あるならん

二〇二四年四月二日

青空に辛夷の映ゆる朝かな
帰北の吾子見送る駅に桜まじ
碧眼の人と並びて花下に佇つ
久闊を叙す満開の花の下
七色に陽をはじきあるしゃぼん玉
四姉妹ボックスシート花の旅
もの憂さな猫の欠伸も麗らけし

わかば 智恵子 康子 かえる 澄子 千鶴
なつき かえる 康子 むか子 たか子
康子 せいじ 明日香 かえる もとこ
山椒 なつき 康子 わかば
明日香 むべ ぼんこ たか子 康子 かえる 澄子

バトミントン羽根満開の花に消ゆ
羽拡ぐ孔雀に喝采花の客
オクターブ上げて啼きつぐ匂鳥

二〇二四年四月一日

老幹の洞に舞ひ込む落花かな
花葦の侍る大樹の根方かな
旅うらら踏切待ちの間も俳句
靴擦れの踵を撫でる新社員
うち屈み犬と語らふ春帽子
子ら登るジャングルジムへ花吹雪

二〇二四年三月二日

対岸の土堤を埋めて花菜畑
霖雨晴れ芽吹く垣根となりけり
雨粒の珠と輝く木の芽かな
里山を墨絵ぼかしに春霞
べちやくちやとひと駅愉し踏青子
思はざる友と再会イースター
旅疲れ癒やす車窓の春夕焼
旅うらら俳句談義の尽きるなし
行き一分帰り三分や花堤

二〇二四年三月二〇日

花冷の両手につつむふるまひ茶
草野球雀隠れに球探す
鎌倉のブランド大路踏青す
焼杉塀つづく古町木の芽晴
賀茂堤花の遅しとたもとほり
エリカ映ゆ異人館めく白壁に
白晝に深く被りし春帽子
中庭に花見椅子置く資料館

康子 なつき やよい 澄子 わかば 康子 澄子 康子 山椒 康子 澄子 康子 澄子 康子 澄子 康子 澄子 康子 澄子 康子 澄子

毎日句会みのる選・二〇二四年四月七日